

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16671

研究課題名(和文) &lt;女性のリズム&gt;に関する史的研究 日米比較を軸として

研究課題名(英文) A historical study of the acceptance and progress of the concept of women's menstrual rhythms: A comparison of the US and Japan

研究代表者

横山 美和 (YOKOYAMA, Miwa)

お茶の水女子大学・基幹研究院・基幹研究院研究員

研究者番号：70725267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀後半に現れた、月経周期に沿った生理的な変動すなわち<女性のリズム>という考え方の受容と展開に関する歴史の日米比較を行うことを目的として遂行した。米国では1930年代に「リズム」という言葉が荻野式避妊法を指す言葉として使用され、宗教や法律とかかわって産児調節運動に多大な影響を与えた。一方日本では荻野式避妊法は宗教的な意味合いはほとんど重視されなかったことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、荻野式避妊法の日米における受容について取り組み、これまでほとんど研究がなされてこなかった双方の社会の産児調節やその運動の歴史の側面を描きだしたことにある。産児調節運動の歴史に関する研究は、中心に取り上げられてきた人物たちが荻野式避妊法を拒絶していたことから、これまで深く立ち入って研究されることがなかった。しかし実際はカトリック教徒のみならず多くの人が荻野式避妊法に関心を寄せた事実があり、特に米国では国家や教会を巻き込んだ論争を起こしていたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aims to compare the acceptance and progress of the concept of women's menstrual rhythms. In the US, "the rhythm method" is typically taken to refer to the Ogino method, a contraceptive method that has been in use since the 1930s. The rhythm method had a great impact on early 20th century society and surprised birth control activists because some Catholic doctors interpreted the Pope to have approved of it. As a result, their books on the technique were freely distributed through the US mail, despite laws that banned the sending of information related to contraception. Some birth control activists criticized Catholics and the Post Office, while others tried to take advantage of the situation. By contrast, use of the Ogino method was rarely regarded as a religious matter in Japanese society.

研究分野：科学とジェンダー、科学史、医学史

キーワード：避妊法 オギノ式 産児調節運動 産児制限運動 ジェンダー リズム法 医学史 科学史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

現代では女性自らが体の<リズム>を知ることが重要視され、基礎体温変化の知識などが排卵日や月経の予測に役立てられている。報告者は博士論文(横山 2013)で19世紀の月経知識の論争と女性の社会進出の関連について取り組んだ。特に、月経を発情や病理としてとらえる19世紀の主流の科学言説に対し意義を唱えた、女性医師 M. P. ジャコービー (Jacobi 1877) の議論に着目して分析した。彼女は理論的検討、アンケート、仮説形成、実験観察をもとに、月経は発情や病理などではなく、女性は「付加的栄養のリズミカルな変動 (rhythmic wave of supplemental nutrition)」を持ち、徐々に生殖のために蓄えた栄養を月に一度穏やかに排出しているだけだと訴えた。この女性のもつ生理的な変動という考えは、全面的にはではないが主流の婦人科学でも受け入れられたが、月経や排卵には不明な点も多く混沌とした状態が続いていた。報告者はジャコービーの仮説がどのように発展したかをさらに調査することとしたが、その過程で、1924年に荻野久作が打ち立てた「排卵の時期は、予定月経前第12日乃至第16日の5日間なり」「受胎の時期は予定月経前第12日乃至第19日の8日間なり」という「荻野学説」が、それまでの混乱した排卵のタイミングと月経の関係をめぐる説を一新する画期的なものであったことを再確認した。荻野学説は1930年にはドイツでも発表され、また避妊に応用されたことで一躍国際的な脚光を浴びることとなったことで知られている。性ホルモンの発見やその応用である経口避妊薬のピルの受容に関しては多くの研究があるが、荻野式避妊法の受容については、カトリック教徒の受容以外の先行研究は少ない (Viterbo 2000)。

そこで、ジャコービーと荻野を必ずしも直接関連づけることはできないかもしれないが、月経周期に沿った変動を<女性のリズム>としてとらえ、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの基礎となる知識と、社会との関係性について包括的に研究ができないかと考えた。そして、これまで米国を対象として研究していたが、そこに日本も加え、異なる文化的背景を持つ社会での<女性のリズム>に対する人々の態度を比較することとした。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀後半に現れた、月経周期に沿った生理的な変動すなわち<女性のリズム>という考え方の受容と展開に関する歴史の日米比較を行うことにある。特に、1877年に米国の女性医師 M. P. ジャコービーが月経のメカニズムを説明するために提唱した「付加的栄養のリズミカルな変動」という説や、1924年に荻野久作によって提唱された排卵時期に関する「荻野学説」が、様々な立場の医師や女性たちにどのように解釈され展開されたか、また社会にどのように受容されたかに注目する。

### 3. 研究の方法

本研究は、米国に関してはハーヴァード大学シュレジンガー女性史図書館とスミスカレッジのソフィア・スミス・コレクションのアーカイブでの史料調査や、日本の図書館でも閲覧できる産児調節運動関連の雑誌や資料集の調査を行った。日本に関しては、国会図書館のOPACや、Web 大宅壮一文庫、読売新聞・朝日新聞・毎日新聞の記事データベース、ざっさくプラス、CiNii、DVD-ROM 版婦人公論、20世紀メディア情報データベースで、「オギノ式」などのキーワード検索から記事を収集し分析した。またお茶の水女子大学図書館や新潟大学図書館、石川武美記念図書館も利用させていただいた。

### 4. 研究成果

本研究の成果は大きく以下の二つをあげることができる。

#### (1) 荻野式避妊法が米国社会に与えた影響

荻野久作が1930年にドイツで荻野学説を発表し、それを受けカトリック教徒のオランダ人医師スマルダーが荻野学説を応用した避妊法を紹介し反響を呼んだ。キリスト教では禁欲以外の自然に反する避妊は罪であると考えられていたが、1840年代に排卵の時期が(誤解であったが)推定されると、その時期に性交を避けるという避妊法が定期的禁欲法として密に行われていた。その下地があったうえで、荻野学説は排卵の時期をより正確に計算できたため大きな注目を集めたのだった。1930年12月31日には、ローマ教皇のピオ11世が回勅『貞潔なる婚姻 (Casti Connubii)』を発表したが、そこに記された文言が荻野式避妊法を利用することを公に認めていると解釈する医師や聖職者たちが現れた。教皇が同法を公式に認めるのは1951年のことであるが、1930年代より宗教的なお墨付きを得たものとして拡散することとなった。

1932年にはカトリックの米国人医師のレオ・J・ラッツが『女性の不妊と受胎のリズム: K. 荻野博士(日本)とH.クナウス博士(オーストリア)による、妊娠が不可能な時期と可能な時期に関する発見の生理学的、実用的、倫理的な面に関する議論』(以下『リズム』)を発表し、米国に荻野式避妊法をもたらした。当時米国には「猥褻」と認定されたものの売買や取引や郵送を禁じる連邦法である「猥褻な文書および不道徳な用途の物品の取引および流通を禁止する法律」が存在し、避妊具や避妊情報も「猥褻」とされていたのだが、この『リズム』や荻野式

避妊法を応用した受胎調節カレンダーは自由に郵送を許可されたという事実があった。報告者のアーカイブでの調査では、その事実にマサチューセッツ州の産児調節同盟の活動家らが驚き、『リズム』がカトリック教徒とも手を取り合っていくきっかけになると期待したことがわかる史料を発見した。一方で、最も著名な産児調節運動家だったマーガレット・サンガーは異なる反応であった。サンガーは、カトリックの聖職者に産児調節運動を激しく非難されていたが、そのカトリックが荻野式避妊法を紹介し、さらに米国郵政省が本来「違法」であるはずの避妊情報の郵送を許可していることに怒りを覚えたことが、書簡集等からうかがえる。サンガーはこれを国家的な問題ととらえ、米国議会での産児調節に関する意見陳述で取り上げカトリックと国の矛盾を突きながらも、産児調節の必要性はみな理解している証拠として利用した（横山 2020）。

このように本研究は、荻野式避妊法が米国の法律や聖職者によって例外的に扱われていたこと、産児調節運動家らも多様な関心を寄せ自身らの運動に利用したことなど、米国社会に多大な影響を及ぼしたことを明らかにした。

## (2) 日本における荻野式避妊法の受容

1924年に荻野久作は『日本婦人科学会雑誌』（第19巻6号）で荻野学説と呼ばれることになる説を発表した。1926年にはすでに婦人雑誌に紹介されたことは先行研究で触れているが（荻野 2008）、各種データベースでキーワード検索することにより、受容の状況をより詳細に調べることができた。また、一般向け、専門家向け、カトリック教徒向け媒体で整理しながら分析を行った。

荻野学説は1920年代に婦人雑誌で取り上げられ、女性たちは多いに関心を寄せたが、1930年代に入ると日本の産児調節運動のリーダーの一人である医師の馬島憐らは、学説そのものは認めても避妊への応用は危険であり、そういったものを婦人雑誌が安易に広めることは害であると大手新聞で大々的に批判した。しかし婦人科医の多くは、専門誌であっても沈黙を守っていた。1932年に東京帝国大学の教授入澤達吉が一般向け雑誌に荻野式避妊法を紹介すると一層世間の関心が高まり、そのことが避妊そのものすら扱おうとしなかった医師たちが前向きになるきっかけとなったようである（横山 2018）。

また、カトリック系雑誌を調査したところ、日本においても公式の容認より前に荻野式避妊法は罪とならない避妊法として言及されていたことが明らかになった（横山 2019）。

一般向け媒体や専門家向け媒体では、荻野式避妊法はごく一般的な避妊法のひとつとして取り上げられ続けた。1950年代後半になるとカトリック教会で正式に認められたという話題が出てくるが、おおよそ海外の出来事としてとらえられている。日本ではカトリック教徒がごく少数であることを考えるとうなずけるものである。また、荻野式避妊法は荻野の偉業の一つとして（彼は避妊法として乱用することを問題視していたが）繰り返し称えられた。荻野が大学に属さず「町医者」であったことから、教皇という世界的な存在と対比し、荻野の偉大さを強調するような描き方がなされることもあった（Yokoyama 2019）。

以上に見たように、日本では荻野学説や荻野式避妊法は早くから注目されてきたが、米国のようには避妊と宗教の問題はほとんど議論されず、一般的な避妊法として捉えられ、また、日本人医師の偉業を示すものとして取り扱われることが多かったことを明らかにした。

## <参考文献>

- Jacobi, Mary Putnam. 1877. *The Question of Rest for Women during Menstruation*. New York: G. P. Putnam's sons.
- 荻野美穂 2008 『「家族計画」への道：近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店。
- 横山美和 2013 「女性医師 M. P. ジャコービーの月経成因論の一考察—19世紀後半米国における科学知のジェンダー・バイアスをめぐって—」お茶の水女子大学人間文化研究科博士論文。
- . 2018 「日本の専門家らによる荻野学説の受容について」日本科学史学会生物学史分科会『生物学史研究』No. 97, 87-89 頁。
- . 2019 「日本のキリスト教徒による荻野式避妊法の受容について」日本女性学会 2019 年度大会、東京、6月16日。
- . 2020 「1930年代米国におけるオギノ式避妊法をめぐる郵便・宗教・産児調節運動の様態」『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第21号、85-99 頁。
- Viterbo, Paula. 2000. "The Promise of Rhythm: The Determination of The Woman's Time of Ovulation And Its Social Impact In The United States, 1920-1940." PhD. Dissertation, State University of New York at Stony Brook.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 横山美和	4. 巻 97
2. 論文標題 日本の専門家らによる荻野学説の受容について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『生物学史研究』（日本科学史学会生物学史分科会）	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山美和	4. 巻 第 期56巻284号
2. 論文標題 書評：平体由美・小野直子編著『医療化するアメリカ 身体管理の二〇世紀』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『科学史研究』（日本科学史学会）	6. 最初と最後の頁 338-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山美和	4. 巻 21
2. 論文標題 1930年代米国におけるオギノ式避妊法をめぐる郵便・宗教・産児調節運動の様態	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学ジェンダーフォーラム年報	6. 最初と最後の頁 85-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 コムストック法とリズム法 20世紀前半米国における荻野式の受容に関する考察
3. 学会等名 日本女性学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 米国のコムストック法と産児調節運動
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2018年大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Miwa Yokoyama
2. 発表標題 Ogino-Knaus/rhythm method and the birth control movement in early twentieth-century America.
3. 学会等名 History of Science Society 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 日本における荻野学説の社会的受容について
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2017年大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 日本の専門家らによる荻野学説の受容について
3. 学会等名 日本科学史学会生物学史分科会2017年度「夏の学校」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 女性の基礎体温研究の歴史をめぐるー考察 19世紀末から20世紀半ばの米国を中心として
3. 学会等名 国際ジェンダー学会2016年大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 アメリカのオギノ式 1930年代の「自然な」避妊法の導入をめぐる郵便・宗教・産児調節運動の様態
3. 学会等名 立教大学ジェンダーフォーラム第77回ジェンダーセッション(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miwa Yokoyama
2. 発表標題 The Ogino method and religion in Japan
3. 学会等名 15th International Conference on the History of Science in East Asia (ICHSEA 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山美和
2. 発表標題 日本のキリスト教徒による荻野式避妊法の受容について
3. 学会等名 日本女性学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----